



KEMOMI-MIX

# けもみぐす

小説 倉田シンジ  
挿絵 SASAYUKI

立ち読み版

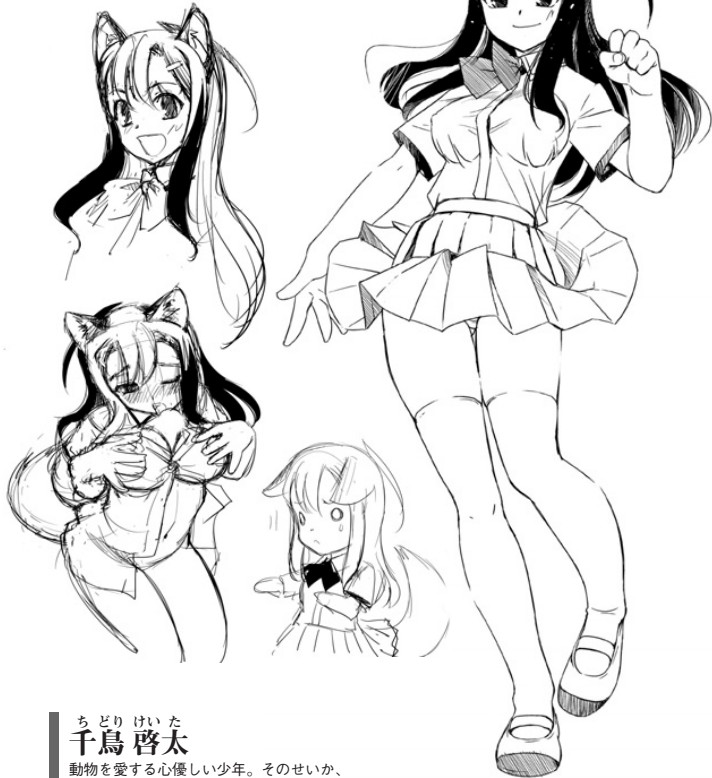


## 登場人物紹介

Characters

いぬいあかね  
**戌亥茜**

啓太のクラスに転校してきた少女。天真爛漫な元気っ娘。おっちょこちょいながらも一途な性格。



ちどりけいた  
**千鳥啓太**

動物を愛する心優しい少年。そのせいか、彼にだけ見えてしまうものがある？

なえむらりさ  
**苗村 里沙**

啓太の先輩で、彼が通う学園の生徒会長を務める。成績優秀でその凛々しい美貌から人気は高いが、人付き合いは苦手らしい。



しみず ななこ  
**清水 菜々子**

学園一の美人教師で理事長の孫。啓太が住んでいる学生寮の管理人も兼ねている。おらかでおちゃらけた感じのある女性。

プロローグ

第一章 転入生と先輩と……？

第二章 体育用具室は危険な香り？

第三章 ケモノミミは好きですか？

第四章 僕らはみんな仲良しこよし？

第五章 お嫁さんいらっしやい！

エピローグ



「あ、お婆ちゃんとは普通の人間なんですよ？　うちのお爺ちゃんと結婚して里に入って、今も元気に暮らしてますっ」

要約すると、あまり人間と変わらないらしい。オオカミの姿になれること以外は。

さつきから特に意識せずとも目に見えている耳とシッポが、茜の言葉に合わせて右に左に。どうやら茜は感情が表に出やすいだけでなく、耳とシッポにも出やすいようだ。

「一年前……この近くに用があつて、わたし、初めてのお出かけで……」

「あの日のことだよね」

「はいっ。お父さんたちと一緒にだつたんですけど、はぐれてしまつて……焦つて走り回つていたら、しかも崖から落ちちゃつて……」

一年前のことが思い出される。

（まさか、あの子とこんな形で再会するとは思わなかつたけど……）

嬉しい嬉しくない以前に、予想外すぎる形だった。

「啓太さんに助けてもらつて……あんなによくしていただいて……。で、でも、そのうちお父さんが見つけてくれて……急いで帰ることになつて」

だんだん話し声が小さくなってきた。

「で、でもっ！　ちゃんとお別れしたかつたんですっ！」

急に姿を消したことを言っているらしい。動物相手ということもあつて特に気にしてはいなかつたけれど、向こうは礼も言えなかつたことを気にしてくれていたようだ。

「でも、わたしたちのことは他の人には秘密なので……しようがなく  
そしてしよぼーんとなつて沈黙してしまつた。

「……ぶぶっ」

「……？」

啓太が急に吹き出したので、茜が不思議そうに顔を上げる。

「あ、ごめん。さ、さつきから、耳とかしつぽが……。ぴよこぴよこしたり、しよんぼり  
したりしてるから……ぶぶぶっ」

「ひ、ひどいですっ！ 真面目なお話してるのにい！」

「だって、そんなにしよんぼりすることないよ。僕は気にしてなんかないし……」

真剣に謝る茜には悪いが、でもやつぱり啓太にとつては、彼女を助けたことも、急にい  
なくなつてしまつたことも、たいしたことではなかつた。こうやってちゃんと会いに来て  
くれたのだから、むしろありがたいくらい。

「少し……触つてみていい？」

なので、なんとなく耳を眺めながら、そんなことを聞いてしまつた。

こくりと頷いてくれた茜の頭に手を伸ばし……さわり。

「ひゃ……くすぐりたいですう」

「ごめんごめん……。でも、ちゃんと触れるんだ……」

くすぐりたいとは言いがらまもまんざらではなさそうなので、ついつい啓太はさわりさ

わりと耳を撫でてしまう。まるで、頭を撫でられて心地よさげにしている犬そのものだ。

「わたしたちが人の姿をしている時に、頭の耳やシッポを見たり触れたりできる人はほんどいないんだって、お婆ちゃんが言っていました……。クウン……」

まさに、主人に頭を撫でられる飼犬の状態だ。甘えるような声を出してしっぽをパタパタし始めた。

(ほんとにあの子なんだ……)

その姿が、一年前のオオカミと重なる。

「でも、啓太さんはちゃんと見えてたんですね……。なにも説明してなかったのに、わたしのことも分かってくれました……っ」

「あ、うん。でも、初めて会った時に変なこと言われたから、つてのもあるけどね」

「そんなことないですっ！ たとえそれがなくても、啓太さんはわたしに気付いてくれたはずですっ！」

そう訴えるように顔を上げ、茜はジッと見上げてくる。

確かに、茜を初めて見た時からずつと妙な親近感を抱いていた。それに加えて頭の耳やシッポ……いずれは気付いていただろう。

(そっか、これも縁っていうことなのかな……。すごく珍しい縁だけど)

とにかく、今日一日抱えっぱなしだった疑問は晴れた。

かなり奇想天外な真実だったけれど、そのわりに混乱しなかったのは、啓太もある程度



想像できていた結末だったからだろうか。あるいは、そう望んでいたと言うべきか。茜の瞳にまたしても感涙が浮かんで来て、これ以上ないくらいウルウルしている。彼女も、この不思議な縁に思うところがあるのだろうか。

「あ、あの……っ!!」  
「？」

突然、大きな声を出したかと思いきや。

茜はバツと身を翻して正座して、マットに三つ指をついて。

「わたしを啓太さんのお嫁さんにしてくださいっ！」

用具室に響き渡る大声だった。

「……………え？」

一瞬、なにを言われたか分からない。

すると茜はもう一度。今度は、ぐぐぐと身を乗り出して。

「わたしっ、啓太さんのお嫁さんになりたいですっ！」

「はあああっ!!」

なにからなにまで突然すぎたが、今度のそれはレベルが違う。

「お、お嫁さんって……え？ ええっ？」

「あっ、あのっ、一年前に助けていただいてから、ずっとお慕いしてましたっ！ 転校してきたのも、啓太さんにもう一度会いたくてっ……ううう」

言いながら自分の言葉で感極まってしまったのか、もう泣き出さんばかり。

なのに、まるで結婚を強要するようにじりじりと近づいてくる。もともと隣り合って座っていた二人の距離が限りなくゼロに近づいていく。

ぷにゅつと胸板に柔らかい感触。続いてふわりと漂う髪の毛の香り。

目の前というか、顔のほんの数センチ先。茜の潤んだ瞳があつて、柔らかそうな唇があつて、触り心地のいい頭の耳があつて……。

「あ、あの……」

「あう……。へ、返事はまた今度で構いませんから……っ」

ぼつと顔を赤らめてそう言いながらも、茜は身を引こうとしない。

それどころか、硬直してしまった啓太にますます近づいてきて……。

ちゅ……。

唇が触れ合っていた。

（ええええええ？ どどど、どうしよう？ 柔らかいよ？ どうしよおおお？）

ピキーンと効果音が聞こえそうなほど硬直中の啓太は、混乱するばかりで反応できない。薄く目を開いた、茜の上気した頬が目の前に。さっきより艶めきを増したように見える唇が、ほの赤い膨らみを押しつけてくる。

「啓太、さん……んっ、ふうう……」

ちゅ、ちゅばっ……。

半開きになった唇に、ぷにっと柔らかい茜のそれがくっついてわずかに動いて。ただ接触するだけのキスの狭間から、舌が覗いてちろりと舐めてくる。

ぞくっ、と啓太の背に走った感覚は、けして不快なものではなく。

「啓太さんに、茜をもらってほしいです……。んん、ちゅ……」

しかも、甘やかな吐息に混じってそんな呟きが聞こえてきて。

（あ、茜ちゃんが……？ 僕のことを……）

そんな風に率直に好意を打ち明けられ、嬉しくないはずはない。

ちよつと特殊な条件下ではあるものの、相手はすぐくかわいらしい女の子で、それが自分を好きだと言ってくれていて……。耳とシッポが生えているのを除けば、自分には不釣り合いなほどの女の子だ。しかもそれだって、さつきこれが現実なのだと思え入れってしまった啓太からすれば、さして大きな戸惑いにはならず。

自分の下半身に血が集まっていくのを感じてしまう。

体重を預けてくる茜に押され、マットの上にゆっくりと押し倒されていく啓太。

「えへへっ……啓太さん……」

茜は嬉しそうに頬ずりしてから、唇を動かし、啓太の首筋へ。舌で舐め清めるようにしながらじわじわと移動していく。

「あ、汗……かいちゃってるよ？ 汚いよっ」

「そんなこと、ちゅ、んっ……ないです。ちゅ、ちゅっ……。啓太さんの匂いです……」

ちゅっ、ちゅっ、と何度も唇を触れさせながら、だんだん大胆に。舌を伸ばしてぺろぺろと舐められたところが、ジソツと熱を帯びたような余韻を残していく。

(すぐく……きもちいい……)

献身的な舌の動きに意識が集中すればするほど、舐められたところがじわじわ熱くなって、やがて全身がそんな感覚に包まれ始めて啓太は呆けたようになってしまった。

それは茜も同じようで、いつもはクリクリした瞳をとろんとさせて、少年の身体にぺろぺろぺろ、飽きることなく舌を這わせ続けている。

舌の蠢きが首筋から頬に移り、再び唇同士が触れ合う。

「あ……」

その瞬間、啓太は無意識に舌を出していた。

「んっ、ふう……ちゅぱ、んく、ふ……けいたさあん……」

それを迎え入れた茜は、舌と舌を擦り合わせるように絡めてくる。初めて同士の舌接触到にわずかなぎこちなさがあるものの、それはすぐになめらかな動きに。

ちゅ、にち……ちゅぱ……。

舌と舌が擦れ合う、かすかなくすぐったさが心地よい。それを伝って流れてきて、自分のものと交わる相手の唾液がもつと欲しい。

重なり合う身体が少し動いた拍子に、血を集める股間のもものが茜に当たった。まるで自己の存在を示すように、布越しのペニスがひくんと跳ねる。

「あ……。け、啓太さんの……。硬いですう」

太腿のあたりにぎゅっぎゅっとして擦れるように当たっている男性器の感触に、少女は嬉しそうな呟きを漏らした。

「あの……。それは……」

なんて言っていないか分からない。恥ずかしいからそんな反応は隠しておきたいのに、彼女の身体に触れているのがとても気持ちよくて。ほとんど動かさずに太腿に押さえつけられているだけに、それだけで胸の奥がとんでもなく疼かされてしまった。

そう——そこを彼女にもっと触れてほしいのだ。

でも、こんな経験が初めての少年にはそれを口に出すことができない。

「……………」

どうしたらいいのか迷い、焦れている啓太の様子を察したのか、茜が手を伸ばす。

「か、硬い、です……。でも、これが啓太さんの……」

喘ぐように掠れさせた声で呟きながら、そっと股間のものを掌中に。きゅっと、少しだけ力の入った手の平で握り締めてくる。

「あう……！」

それだけで、啓太の全身がぞくぞくつと痺れ上がってしまった。

恥ずかしいのに気持ちいい。もっとしてほしいのにうまく言えない。初めての経験に頭に血が上ってしまって、そんなもどかしさに気が狂いそう。

「茜ちゃん……！ あいつ、も、もつと……」

ついに口を出したのはそんな要求。恥ずかしさをかなぐり捨てて、もつとこの少女の手に包まれたいと願ってしまう。

「は、はいっ！」

なのに茜はといえば、求められたことに満面の笑みで応える。ご主人様に奉仕することが嬉しくて嬉しくて仕方ないと、左右に元氣よく跳ねるシッポの動きが物語っていた。

きゅつと握られたままの手が、硬い肉の形に沿って上下に動く。

「き、きもちいい、ですか……？」

壊れ物を扱うように、そろりそろりと擦り上げると。布の下でペニスがヒクヒクしているのが伝わってくる。

「うん……すご、くっ」

啓太も正直に答え、茜は自信を得てさらに動きを強くしていく。

少し身体を起こして四つん這いになった茜の手がランニングパンツにかけられ、それをずり下ろしていく。さすがにそこまでは覚悟していなかった啓太だが、いまさらそれを止めるような言葉を口にする気はもうなかった。

「あっ……すごいです。こんなに……！」

茜が心底ビックリしたように目を丸くしたのは、下着のトランクスが急角度で持ち上がっていたからだ。いかにも窮屈そうなペニスを解放してあげようと、さらにパンツも下ろ

されていくと……ぶるん！ と飛び出てきたのは緊迫した剛直。

たぶん、勃起したペニスというものを初めて見たのだろう。

生で姿を現したこの繊細な部位をどう扱っていいものか、茜はさつきまでより少し怯えたように瞳を揺らして、仰向けで身を起こした啓太を覗き見てくる。

「あの……啓太さん……？」

「うん。おねがい……そこも……」

大きくもなく、小さくもなく、極めて平均ランクの男性器。初めてそこを異性に見られてしまった恥ずかしさなんて、もうどうでもよかった。

それより、今はそこに触れてほしくてたまらない。

それも、自分を慕ってくれるこの少女にもっと触ってほしかった。

「はい……」

その気持ち伝わったのか、大きな瞳をわずかに細めて嬉しげな茜。

そっと添えられた指先でペニスを持ち上げると、迷うことなく唇を近づけていく。

ぶちゅ……つと柔らかいものが触れて、啓太の身体に電流が走った。

（うううっ！ 僕のアソコに、茜ちゃんの唇が……！）

それだけでカッと全身が火照り、今までに感じたことのない興奮でペニスが一段と大きくなった。しかもそれだけに留まらず、茜は舌を出して。

ちゅ……ぱ、れろっ、ぴちゅ……ぴちゅ……

「ううっ……！」

まだ半分包皮をかぶったままだった亀頭部分が、少女の舌に這い回られている。

どくん！ と心臓が跳ねて、全身が突っぱったような感覚。そして緩やかに広がっていき、下半身を中心にした甘い痺れ……。わけが分からなくなるほど興奮してしまっていて、呼吸が情けなく乱れていくのを止めることができない。

亀頭にべたりとあてがわれた舌が、ペろりペろりと舐め上げられる。

くびれの部分はまだ皮に包まれているのに。四つん這いで股間に顔を埋める茜は、構うことなく包皮ごとカリを舐め上げ、頭を出した鈴口部分に舌先を躍らせた。

生温かいねっとりした感触が、ペニスをぬぶぬぶと包み込んでいく。

（うわ……ぬるぬるがっ、うう……！ 絡みついてくる……）

ペニスを包み込んだ初めての感覚に、啓太の腰が浮きそうになる。

（だっ、だめだ、我慢しないとっ……！）

そうしていると射精の欲求があつという間に迫り上がってきて、少しでも気を緩めたら爆発してしまいそうだ。このままでは精液を彼女にかけてしまう。それはなんだかいけない気がして、啓太はこの快楽をどう処理すべきかも分からず我慢した。

必死に腰の奥に力を込めてそれをこらえる……が、かつてないほどの興奮と快楽に晒されたペニスが、どうしても腰を持ち上げてしまう。

その途端、触れられたハウセンカが弾けて種を飛ばすように、ほとんど勝手に包皮が剥





き上がっていた。

「わ！ おちんちんって、こんなに……。なんだかわいいです、えへへ」

少しビククリしながらも、茜は啓太の表情からこのまま奉仕しても構わないという自信を得て……。剥け上がったばかりの亀頭をぱくりと。

ちゅば……。じゅっ、ぷぷぷ……。にち、にちゅうっ……。

唾液の粘る音が、先走りの液体と混じってひととき大きくなっていく。そこに少女の吐息も混ざって、いやらしいほどに奉仕の音は響き渡る。

「んあむ……。ふ、ちゅっ、ぢゅ……。んんは、む……。ちゅばっ、じゅぼ、ちゆる……」

唇が肉茎をぐるりとくわえ込み、少しずつ上下に動き。その中では舌がぺろぺろと亀頭を舐めしゃぶっている。温かくてねっとり絡みついてくる感覚はますます強くなるばかり。

「んっ……」

目を下ろしたら、上目遣いにこちらを見上げてくる茜と視線が合った。

なんとなく気恥ずかしいのに、目が逸らせない。その瞳は奉仕の喜びに満ちていて、啓太に「気持ちいいですか？」と尋ねかけているように見えた。

「んふあ、んん、はあ……。えへへ、啓太さん……。はむちゅ、んちゅ、つぶ……」

わずかに口を離して、肉茎にキスしながら自分の名を呟く少女。

その瞬間、啓太はえもいわれぬ幸福感に包まれた。

（茜ちゃん……。かわいい、な……）

ちよつと世間知らずなところが放っておけなくて、でも小動物っぽい仕草がかわいくて、いつも元気でニコニコして……こんなにかわいい女の子が、これほどまでに自分を好いてくれる。それが嬉しくて、幸せで、愛おしかった。

「あふう……ちゅば、ちゅるる……んんうっ」

すべった唇が肉棒の根元まで到達し、ちゅるると音を立てて吸引される。カリに引っかけた舌が敏感な裏スジのあたりを擦り上げ、ペニスがひくんと震えた。

「くううっ！」

ぞくぞくぞくつと背筋が痺れる。力を込めようとした腰が、力を失ったようにあやふやな感覚しか返してこない。ペニスが大きく、ビクン！と跳ね上がった。

じゅぱっ！ちゅるる、ちゅうううっ！

そこを、絡みつくねつとりした感触でまたしても吸い上げられてしまう。

「うっ！だめ、出ちゃうっ！」

抑えきれないところまできていた欲求が、その刺激と気持ちの高ぶりに背を押されて堤防を決壊させる。もう止まらない。

「ふあ……？んっ、きや……！」

どぶっ！どくどくっ、どくどびゅ！どぶどぶどぶぶうっ！

舌を押しつけるような勢いで、どろりとしたものが口の中いっぱい。

突然口の中で始まった射精にびっくりした茜だが、しかし顔を離すことはない。

責めるくらいなら二人ともこの行為をやめてほしいところだが、少なくとも啓太の身体はそんなことは思っていないようだ。両腕を支えにして上半身だけを起こした姿勢で、だらりとさせた下半身は少女たちに任せつきり。

(茜ちゃんも、里沙さんも……こんなに僕のことを……)

愛らしい女の子二人に好意を寄せられる幸せに胸が疼く。二人ともかわいくて、健気で、それぞれに違った魅力があつて——なんて、感慨に耽る啓太をよそに。

「むうう……里沙さん邪魔ですっ！」

「あつ！ なにするの！」

舌愛撫を続けていた里沙を押しよけるように、茜も胸から股間に身体を移動させてきた。啓太の股間でうずくまって場所を取り合う二人。

二人は指できゅつと肉茎を掴んで上下に擦りながら左右から顔を寄せ……かたやピチャピチャと小刻みな動きで、かたやねつとりと絡みつくような舌の動きで舐めてきた。

(すつ、すごく気持ちいいけど……！ いきなりそんなっ……！)

ぴちゅ、ねろ……ちゅぷ、ぷちゅつ！ れろおおっ……！

「んあ、ふ……ちゅぱ、ちゅつ、啓太君のものに触らないで……つ、ぴちゅちゅ……」

「そっちこそですう、んんっ、はあ……ちゅりゅうっ、ぷちゅ、ちゅううっ」

競い合うように相手の顔を押しよけるのけ、ペニスに頬ずりし、舌を跳ねさせて。やがて里沙がぱくつと亀頭をくわえ込んでしまうと、茜はそれを取り返そうとして、

「えへへっ……」

「んんんっ!? ひゃ、ひゃにをお……するのよ……っうん！」

しゃがみ込む里沙のお尻を掴むや、その秘丘に指を這わせていた。

女の子同士らしい、遠慮のない力加減で指先をぐっと押し込む。と、濡れそぼっていたショーツがぐちつと音を立てて割れ目に食い込んだ。

「ひゃんっ！ む……ふうう、く……ふうう、んっ、ちゅば……」

あくまでペニスを手放そうとしない里沙の裂け目に沿って指がずりゆずりゆと行き来し、そのたびにネコ少女の瞳がひくひくつと揺れて細められていく。

「うわわっ！ く、うう……っ！ ふ、二人ともっ……！」

しかし、悲鳴を上げていたのは里沙ではなく啓太だ。

ぱくつと亀頭をくわえ込んだ彼女の唇が、カリ首に食い込むほど擦られて吸い上げてくる。でたらめに動く舌先は鈴口を強く押し込んで、尿道をほじるかのよう。

（でっ、出ちゃうっ……！）

限界を感じたその瞬間、しかし里沙の口が離れてしまう。射精のタイミングを逸したペニスは苦しげにひくつきながらも、わずかに余裕を取り戻した。

「ひゃあっ、んん……！ やめ、なさい……」

濡れた下着の上にぷちつと盛り上がっているクリトリスの膨らみ。それを指先にぐっと押さえ込まれ、さすがに里沙もビクッと背を反らしてしまっている。

「えへっ、いただきまーすっ」

その隙にペニスは茜に奪い取られ、亀頭部分は再びねっとりとしたぬめりに包まれる。

(二人とも、もはや僕のことは目に入っていないんじゃないんじや……？ ううっ……)

しかしペニスへの執着はあるようで、茜の唇が痺れっぱなしの肉茎をきゅっと締めつけてきた。唾液まみれになった花唇は隙間なくぴたっと貼りついて、その艶めいた柔らかさで上下に動いてしごき上げてくる。

ただ、火が付いてしまった里沙も黙ってそれを見てはいない。啓太の股間に身体を割り込ませて無理やりペニスの根元付近に舌を伸ばしながら、そこを占有しようとする茜の胸に手を……。ふくよかな乳房を下着ごと、ぐにゅっと潰れるほど強く掴み込んでいた。

「あうう！ 里沙さん、邪魔しないでください……！」

「こ、こんな胸なんか……いくら大きかったって……」

まるで親の敵にでも遭ったように強く揉みまさぐる里沙の仕草が熱っぽい。美少女同士が戯れる……というよりも足を引っぱりあう様は、艶めかしいだけでなく、妙に生々しくていやらしいというか、啓太にとっては目に毒な光景だった。

悶える茜のブラジャーが押しつけられ、四つん這いに身を屈める彼女の乳房がぼよんと弾けた。重力に引かれたふたぶと揺れる砲弾型の柔肉を、里沙の細指が容赦なく揉みしだき、先端の桜色をきゅっと摘み上げる。

「はう、ううう……おっぱい、そんなに引っぱっちゃダメですう……！ んきやつ！」

その刺激を必死にこらえながらも、茜は懸命に舌を動かしていた。

切なげに眉を揺らすその表情がかわいらしくて、今度は彼女の頭に手を伸ばす。啓太の手の平がいい子いい子をするように、彼女のしつとりと艶やかな髪を撫でて。

「け、啓太さん……優しいですう……。んっ、ちゅぱ、ずりゅ、ぷぷぷっ……」

それが嬉しくて余計に顔を蕩かせて、茜は腰をもぞもぞと動かし始める。

ぴんと立ち上がったシッポが左右に揺れて喜びを表していた。おそらくその真下にある秘所は、ぐっしよりと濡れそぼっているに違いない。

(なんか、いい香りがしてきた……)

女の子の体臭、男を誘うような甘酸っぱい香りが周辺に立ちこめている。それは初めて経験した茜の身体の中の感触を思い出させて、股間をむずむず疼かせる……。

「啓太さあん……わたしっ、もお我慢できません……っ」

茜も想いは一緒らしく、腰をモジモジさせたおねだりの上目遣い。抱きついてきた少女はスカートをまくり上げて、じつとりと濡れた縞模様のショーツを腰に擦りつけてきた。

(茜ちゃん、もう……)

泣きそうな表情ですがりついてくる彼女の言葉通り、そっと手を伸ばすとそこはすでに火照りきつていて熱いくらい。下着を通して溢れていた液体がねとりと指に絡みつき、もつと触ってほしい、そこに入れてほしいと粘着音を立てて要求している。

「けっ、啓太君っ！ 茜に惑わされちゃだめえ！」

「わわっ！」

里沙も抱きついてきた。顔を真っ赤にしながら必死にスカートを持ち上げ、啓太の手を取ると下着がシミを作っている場所に押し当てさせる。やはりこちらも、もう限界だと言わんばかりにネットリした汁を漏れさせていた。

二人とも切なげな視線で見つめてくる……。

「ふ、二人とも……」

啓太自身も我慢できそうにない。すぐにこの怒張を二人の少女の中で思うままに突き上げた。そして、二人に満足してほしい。とすれば、啓太が取るべき行動はひとつだ。

股間から手を離すと、揃って寂しそうな表情を浮かべる二人の少女。その頭に、それぞれ左右の手を置いて撫でてやる。

「啓太さあん……、あう……」 「な、なによう、んっ……あ」

一人は瞳を潤ませ、頭を胸板にもたれさせて全幅の信頼を寄せてくる。一人は拗ねたように唇を尖らせながらも、やはりそつと体重を預けてきた。

「ふ……二人とも、あとはもう僕に任せて……」

わずかにつかえながらも、はつきりと。

言い聞かせるように囁いて、啓太は二人の少女から身体を離す。

「……………」

急にリーダーシップを見せた少年を見つめたまま、二人とも無言。むしろさつきより瞳



を蕩けさせて、それぞれに身体をもじもじと揺らしている。

「あの、僕にはまだ二人のどちらか選ぶとかできそうになくなって……でも……二人とも好きだし、仲良くなってもらいたいし……えーっと、だから」

だが肝心なところではやっぱりいつもの啓太。気持ちがあまく言葉にならない。

「ぼ、僕を責めてくれていいよっ！ で、でも、今だけは……どうしても二人としたい、っていうか……！ もう我慢できなくてっ……。あれ？ えと……」

なんとか言葉をひねり出したものの、やはり想いが伝わっているかは疑問。

しかし、二人の少女はといえは……。

「えへへっ……。しょうがないですねえ……啓太さんはやっぱり優しいです」

「ば、馬鹿みたい……。そんなこといちいち言わなくて……」

それぞれに分かってきているようだった。

(……ほっ)

二人にどこまで気持ちが伝わったかは分からない。ただ、自分のわがままは受け入れてくれた。こんな自分勝手なことを言ったら、愛想を尽かされてもしょうがないのに。

「……茜が先でいいから……。私、さつきしてもらったばかりだもの」

「わ、里沙さんが……妙に優しく気持ち悪いですっ……」

「うるさいのっ！」

ネコ少女の気まぐれか、里沙は拗ねたように顔を逸らしながらもそんなことを言った。

身体がひとつしかない啓太としてはありがたいが、そんな健気なことを言われては放っておくわけにもいかない。

「あの……じゃあ……。里沙さん、そこに寝てください……」

「え……？」

戸惑う里沙を仰向けに寝かせると、茜の腕を取ってその上に引き寄せた。ずぶ濡れの下着をそつと脱がしながら、今度は四つん這いで里沙を跨ぐように彼女に指示。

「あのう、この体勢はどういうことです……？」

茜が里沙と向かい合う格好になってお尻を上げている。スカートはシッポでまくれてしまっていて、ぷりつとしたお尻とその狭間にあるぼわぼわした恥裂の茂みが見えた。

啓太は答えずに膝立ちのまま。背後からの光景に釘付けになっていた。

（うあ……全部見えちゃってる……）

茜のふつくらとした恥丘がわずかに綻んでいる様子が丸見えになっている。下になって少し足を閉じた里沙の恥裂がきゅつと閉じ合わされて、透明な雫を漏らすところも。

二人もその視線に気付いたのか、居心地が悪そうに腰を揺らした。だが、むしろその動きで二人の恥裂がくちゆりと音を立ててひしゃげて、いやらしさを増加させている。

淫らな体勢にギンッと上向いたペニスを、啓太は少し押し下げた。

挟り込むような角度で茜の恥丘を割り開く。ねちゃつとした秘裂が亀頭に接触して雫を垂らしてきたのを感じて、その沼地へと腰を押し出していく。

「はあ……あううっ！ くう、んん……入ってきます、うん……」

亀頭がぬるっとした感触に包まれ、その感覚が肉棒を根元まで降りていく。

ぬめ光る秘裂を形作る恥丘がだんだんと開かれて、その奥に開いた鮮烈な色が今まさに亀頭を呑み込んでいく。

（ううっ、やっぱり茜ちゃんの中……絡みついてくるうっ……！）

ぷりぷりっとした肉感に包み込まれたペニスだが、その蠕動に呑み込まれる錯覚。何十枚もの舌から舐めしゃぶられるような、ぞくぞくした快楽の虜になってしまいそうだ。

（でも……）

そうだ。茜と自分だけではいけない。

好きな男の子が自分以外の女の子に挿入する瞬間——それを間近に見せられて、弱々しく心を揺らしていたもう一人の少女にも。

啓太は腕を伸ばし、指先でギリギリ届く里沙の股間に手をあてがう。

「ひゃんっ！ ……あ、啓太、くん……」

その下着を掻き分けると恥裂を指で押し開いて、陰核の尖りを押さえ込む。反射的に腰をくんと浮かせた里沙はまるで、「もっと触って」とねだるかのようだった。

「動くよっ……」

ぬるるるっ、ぷちゅ……ずずっ！ ぬぷちゅ、ぢゅぷ！ ぢゅ、にゆるるるっ！

すっかり準備を整えてぬるぬるだった膣道は、スムーズな抽送に膣壁を絡みつけてその

動きを迎え入れる。

「ひあつ！ 啓太さんっ、のお……すぐく、深いですう……！」

ちりりつと頭の中を炙られるような熱感が全身に広がり、少女の口が甘く喘ぐ。

上反り気味なペニス、ピストンのたびに亀頭で膣壁を削っていく感覚。下腹が内側から大きく擦り上げられる感触に、茜はぐぐぐと背を反らした。

たぶんつと揺れ弾んだ乳房が、綺麗な砲弾型を里沙の目の前に垂らしていた。そのタイミングで、啓太はネコ少女のクリトリスをpushさえつけ、クリッと擦り上げる。

「ひゃんんんっ！ あはあ、う……？ ……う、啓太君……？」

聡明な里沙はそれで察したらしい。少し不満げな、相変わらず拗ねた表情を浮かべながらも——ちゅっ、目の前の乳首を口に含む。

「んあつ！ あうう、里沙さん……？ ひんっ、乳首吸っちゃ、だめですう……！」

ずちっ、ずちゅちゅっ！ ぴちゃ、ちゅうっ……！

啓太の抽送音と里沙のおしゃぶり音が淫らに絡み合う。

「ひっ、んんん……！ くあう、啓太さん、ふあつ！ お、おっぱいっ、んんっ！」

里沙に胸を責められ、啓太に下腹を挟られて、茜は戸惑いながらもその声をどんだん甘やかにしていく。もちろんそれは啓太にも影響を及ぼしていて。

(くううう……茜ちゃんの中が、おっぱいを吸われるたびにきゅって締まって……！ こ、これはちよつと、効果がありすぎるかも……うう！)



掴めば掴むだけ溢れ逃げていく柔肉。手の平が沈み込む——そんな錯覚に囚われそう。

「あんっ、くすぐりたい。もつと強くてもいいのよ? ふふっ……」

指を呑み込んでぷにゅりとひしゃげる乳房が、たっぷりの量感で卑猥な形に。ぷにゅにと押し返してくる張りに負けないように指を動かすと、しっとりした肌がわずかに汗ばんでいて、手の平に吸いついてくるのが分かった。指の間にぷりゅつと弾けるような感触が、揉み込みに合わせて、にゅるりとしなやかなものに変わっていく。

「ふう、んっ……いい……だんだん気持ちよくなってきた……」

馬乗りの菜々子が抱きつくように上体を屈めてきた。

ぶるつと揺れ弾んだ乳房肉がふたつ、目の前に吊るされる。重力に引かれて緩やかに逆釣り鐘型を描く肉果実が顔のすぐ近く——そう思うと、無意識に首を伸ばしていた。

ちゅっ、ちゅぶうっ、ぢゅぱっ、ちゅ!

乳首の蕾は乳暈ごとぶくつと盛り上がり、ポリウム感溢れる乳房にびつたりの大きさに膨れ上がっている。それを唇に挟んで吸いついてみたり、その周囲を丸ごと口に含んで口の奥で舌に転がしてみたり。しこりがあるのに柔らかくて、夢中で舐め転がした。

「ふあっ、つあ、啓太くん……赤ちゃんみたい」

菜々子は上体を屈ませた代わりに腰を持ち上げてみてもぞもぞしている。年上の余裕を滲ませてふふつと微笑んではいるが、そのわりに頬をぼうつと淡い赤に染めて、吸いつく啓太が音を鳴らすたびに背を震わせていた。

伸び出たペニスが馬乗りになる菜々子の股間に接触している。ちょうど股の間に挟まれたような肉棒が、にちゃりにちゃりと柔らかな恥丘の感触に撫でられていて、

「あふ、っんん……オチンチン入れたい……。啓太くんの入れちゃうからあ……」

そう囁かれただけで、期待感で余計に亀頭が跳ねてしまう。

（んっ、うああ……。二人も見てるのにつ……）

すぐそばには茜と里沙がいてずっところちらを見ている。二人ともしゃがみ込んだまま、なぜかぼーっとしていられる……。。

なんだか浮気しているような背徳感で余計に啓太は悩乱してしまう。

と、男性器にすり寄せられていたにちゃにちゃした感覚が一瞬だけ消えて、代わりに亀頭をねとりと覆うような感触が。まとわりついてくる柔らかさに呻きを上げてしまう。

（あっ……は、入って、く……）

にち……ちゅ、くぷっ……にゅぶぶぶ。

柔らかくて、ヌルヌルしていて……ぴとりと貼りついてくるような感覚が亀頭を呑み込んでいた。それが蜜壺の入り口だと理解した途端、さらなる膣粘膜がにゅるりと絡みついてくる。ねとつと絡みつく肉のぬめりと温かさがどんどんペニスを降りてきて……。

にゅぶぶぶぶつ、ちゅぷうっ！

根元までペニスを呑み込んだ恥裂から、愛液の雫が飛び散った。

「くあ！ な、菜々子さんっ……！ な、中がっ、うあ……っ」

「あう、んふっ！ あは、とうとうシちゃったね……ずっぽり入っちゃったあ……」

意識的に下腹部に力を込めているのか、入り口がきゅつとペニスの根元を締めつけてくる。それなのに少し中に入ると、肉のぬめりがねつとりと絡みついてきた。亀頭は窄まった腔壁にカリのあたりを捕らえられていて、動かしたいのになまく動かせない。

「んふふ、お姉さんの実力をじっくり味わわせてあげるんだから……あつ、ん……啓太くんの、すごく硬いっ。もつと中でっ、くちゅくちゅしてえ……！」

見ただけでゾクリとするような艶笑を浮かべる菜々子。

くちいつ、にゆる、ぬぶぶぶっ……！

「うううううっ！ 引かれっ……る！」

引き上げられていく腰に合わせて、思わず腰を持ち上げてしまう。強烈にまとわりつく粘膜肉に引きずられているようだ。

ちゅうつと吸われたペニスガムズムズした感覚を湧き上がらせた。だがすぐに動きが反転して、今度はにゆるるつと吸い込まれていく感覚に。降りてきた子宮壁にコツンと頭をぶつけて、またしてもきゅつと食い締められる。

「っ、あああ……、啓太くんのホントに硬くてっ、あ！ やあん、感じるって、つんつんされてる……っはあ、は……んんっ！ もつと深くっ、奥う、突いて……うん！」

腰を揺らめかせた浴衣の裾が広がり、繋がった部分が目に入ってきた。

茂みがびつたりと股間に密着して、くちゅりと粘音を鳴らして揺らぎ、そこからぬるる



つとペニスが姿を現していく。

(先生の……いやらしい……)

にちゃつとした液体にまみれて濡れ光るソコは、抜け出ていくペニスにネットリと膣口を吸いつかせ生々しくめくれ返っていて……。動きに合わせてぶるつと震えるヒダヒダも、引きずり出されて鮮烈なサーモンピンクを覗かせる膣口も、わずかに漂ってくる艶めかしい匂いも。すべてが熟れていて、見ているだけでくらくらしてしまふ。

「ふあ、んんっ……。わ、分かる？ 奥で、当たって……。っ！ はふう、ああん……。あたしの感じるところにびったりっ……。当たってるう……。」

「きつ、気持ちいいです……。こんなに、うっ、中が動いて……。」

「あはあつ、嬉しい……。そんなこと言われたら……。あたしっ」

感極まったようにふるると身体を震わせて、菜々子が顔を寄せてくる。抱きつくようにして、腰だけをいやらしく上下に揺らしながら。

「あたし……。やっぱ啓太くんのこと、好きなのかも……。」

「せつ、せんせい……。？」

「だって……。んあつ！ っん……。あ、あたしたちみたいな存在を受け入れてくれる人って、ホントに少ないのよ？ 啓太くんみたいにっ、ひゃんっ！」

コリッと子宮口をほじられて悲鳴を上げながらも、細めた瞳に笑みを浮かべる菜々子。

「そんなの、あたしだって……。っふ！ ひっ、惹かれちゃうじゃない……。の。っふ、ああ

……んんっ！ ふああ、んうっ、く……！」

耳元で囁くと、再び身体を起こして大きく腰をグラインド。ぐぢゅううっ！ と大きく音を立てた交合部分から、愛液の飛沫がびゅびゅつと飛び散った。

(どうしよう、僕は……うく！ はあ、はあ……)

コトの最中に告白めいたことを囁かれ、啓太は葛藤を頭に浮かべる。

「あえ……？ あっ、あああああっ！」

ぼーっと頬を染めてしゃがみ込んでいた茜が、遅ればせながらに声を上げた。

「あうううっ、里沙さんっ!? 啓太さんが悪女に騙されてますっ！ よくない浮気相手に引っかかっちゃってますうっ！」

「えっ、ええ！ 菜々子先生は危険……！ せんせいっ！ けっ、啓太君を返して！」

「んっ、あんっ！ もう入れちゃったもの……我慢できなかったの……っはあ、んふうんっ！ ひゃっ、あん！ 啓太くんのおちんちん、気持ちいいの……！ ねえ見てっ、あたし啓太くんとしちゃってるのお……あうんんっ！」

茜と里沙の抗議を軽く受け流して腰を揺らし始める菜々子。さつきと同じく馬乗りになった少年を見下ろすその瞳には、確かに我慢の限界を迎えた情欲の炎が浮かんでいた。

「むううっ！ 意地でもどかしますっ！ 啓太さんが困ってますっ！」

茜がそんな菜々子に抱きついた。

「っあ、やあん！ だめよお今はっ……敏感になってるんだからあ、っうんんんっ！」

脇から取りついた茜は、さらけ出された乳房に手を伸ばして乳首を摘み上げていた。

「こっ、こらあ、そんなに……ひゃんっ！ ちっ、乳首伸びちゃうっ！」

くにっ！ と押し潰す圧迫に菜々子の肩が竦められ、細めた目が頼りなく揺らぐ。

「わ、私だって……！」

里沙もそれに続く。茜の反対側に回ったネコ少女は教師のシッポを手に取ると、手の平にもふつと溢れるそれをしごくようにしながら指を下半身へ下ろす。

シッポとお尻を撫でながら、もう一方の手は交合部に。ペニスの出入りする膣口のわずかに上、押された陰核がぷりゅつと包皮を剥き上げ、くりゅくりゅとこねくり回された。

「あっ、んん！ それ、感じちゃうっ……！ だめっ、あ……！ クリがあ、んんっ、ひゃ、潰れちゃうっ、コリコリしないでえ……！ ひゃあ、んんっ！」

思わず背を反らしてしまった菜々子の胸に二人はカプツと甘噛み。正確にはその乳首を捉えた歯列が、こりゅこりゅとしこりを弄ぶ。

（えっ、ううううっ!? ちよ、ちよっどっ……!?)

しかし、茜と里沙の攻撃が効果を及ぼしたのは菜々子本人だけにではなく――。

ぬりゅんっ！ と蠢いた膣内がペニスを食い締めてきた。

「くううっ！ だ、だめっ……そんなにっ！ か、絡みついてくるうっ！」

「啓太くんっ、っは!? すっ、すごいのっ、そんなに暴れちゃ、っひゃん！ んやあつ、きっ、気持ちよすぎい！ ああつ、おちんちん当たってるっ、擦れてるうんっ！」

びくん、と腰を跳ねさせた啓太が肉のぬめりとさざめきにたまらず身悶える。すると菜々子も急に切迫した表情を浮かべて身体をくねらせ始めた。

にゅちちゅ、ぷちゅううっ、にゅぶううっ！ くちゅ、ずりゅうんっ！

「っあう！ 動いちやうっ、勝手にいつ！ んっ、あはああ……！」

揺らすことの多かった腰の動きがどんどん縦方向の動きを強めていく。ぬめりの増した音がぐच्छゅぐच्छゅと鳴り響き、暴れる肉棒が柔褻の集合体に押し揉まれた。

「ひゃっ、あ……あたしっ、んんっ！ やっ、こんなの感じすぎっ、ああっ……！」

さすがに予定外だったのか、菜々子ほうろたえた眩きを漏らしながら息を荒げている。その表情にはほとんど余裕めいたものは残っておらず、すっかり下がったまなじりはふるふると震え、濡れ光る唇からつうつとこぼした涎が喉を降りて乳房にまで。

茜と里沙はそんな菜々子に執拗な攻撃を加え続けていた。

乱暴なくらいにむにゅっ握った乳房を茜がきゅむきゅむと搾るように。茂みに隠れた秘豆は里沙の指によって何度も何度も擦り上げられる。

「先生……気持ちよさそうです」

茜はなぜだかぴとと菜々子に寄り添ってうっとりした眼差し。

「……………んっ」

そして里沙も太腿をモジモジさせながら一心不乱に指を蠢かしている。

「あうっ、んんあ！ 二人とも、先生にそんなことっ、あんっ！ 乳首ダメだっばあ……」



…つうう！ く、クリもつ、そんなにグリグリしちゃ、やあ…：…んんっ！」

茜は浴衣を肩まではだけて乳房を菜々子に押しつけるよう。里沙の浴衣もすっかり緩んでいて、合わせ目からは小さな膨らみが乳首を尖らせている様がチラチラ覗く。

女性同士で遠慮なしの責めにもかかわらず、なんだかその仕草には妙に熱が入っていて、啓太もゾクゾクさせられてしまう。

じっとしていられず、腰を跳ねさせる。いつの間にか汗の雫を身体中に浮かべている菜々子の腰に手を当て、彼女の動きに合わせて…：…ぐちちっ！

「ふあ、くううっん！ あはあ、けいた、くん…：…、気持ちいいのっ？ はっ、んんっ…：…あたしもすごいっ、ああっん、中が掻き回されてるのっ、ううんっ！」

膣道を突き進む亀頭がずりゅうっ！ と肉壁を掻き分ける感覚に、悦びと切なさの笑みを浮かべて菜々子も応じる。

ずちっ！ ぬぬぬっ…：…くりゆりゅうっ！

大きく持ち上げた腰がひねるようになって落ちた。ぐちゅんっ！と互いの体液をしぶかせて密着した股間の中でひくひくっ！とペニスが震え、それをうねる膣壁が舐め上げていく。

「はあ、うううっ…：…！ いっ、きもちいいですっ！」

はね上げた腰がペニスの先端を奥に突き立て、子宮壁をこりゅっ！と歪ませて疼きを生む。膣内が一斉に波打ち、起伏に富んだぬめりの壁面がきゅうっ！と吸いついてきた。

それがあとを引きながら引き抜かれ、もう一度。ずりゅううっ！ と亀頭が押し開いて

いく肉壁の連なりが、灼熱の熱を発してぬめりを滴らせる。

「くっふああああんっ!! 激しいのっ、啓太くんのオチンチンっ、っひん! ああああっ!  
っ! だめえっ、んんんっ! これじゃあたしもっ……っくひやああん!」

ずぶぶっ! にゅちっ、ぐぶぶぶっ! ぢゅぶぶ、ぬりゅうっ!

「ひゃんっ! もお我慢できないっ! んはあ、んんっ! も、もっとオチンチンでずぶぶぶしてえっ! お股の奥うっ……っふあう! はあ、んんんっ!」

どちらが主導権を握っているのか分からなくなるような抽送のスピードアップに菜々子  
がガクガクと身体を揺らす。前屈みに倒れそうになつては豊かな乳房を跳ねさせ、背を反  
らしてはくびれの強い身体のラインを浮き上がらせ。ほとんど脱げかかっている浴衣が汗  
を吸い取つて肌にとわりついている。

(ふう、ふう……っ、菜々子さんも気持ちよくなつて……っ)

さっきまではあんなに余裕たつぷりだった年上の女性を悦ばせている実感が啓太に自信  
をつけさせ、腰の動きを大胆にさせる。

繰り返し繰り返し、みっちり押し寄せてくる彼女の中の粘膜を掻き分け、押しのけて  
亀頭を突き上げる。コンッコンッと奥に当たる刺激を送り込み続ける。

「っはああああう! やんっ、イイっんんんあ! 気持ちいいっ、ふああああっ! 当た  
るっ、うんん! 奥にい、コリコリしてるううっ!!」

感度のよさを表すようにリズムよく締めつけてくる膣内。その沃野よくやを征服するペニスは

限界まで反り返って襲の連なりを掻き擦っていく。ひくひくつと痙攣し始めた粘膜に吸いつかれ、肉棒も脈動が強くなってきた。

「あつ、あああつ、やだ、イッチやう……つふああつ！ んんつ、イッチやいそお……なのつ、くふつん！ はあ、うううんんつ！」

きゅつと唇を噛みしめた菜々子が、啓太を見下ろす視線をなぜか悔しげに。瞳はうるうるさせているくせに拗ねたような表情になって、きゅつと肩を掴んでくる。

「だつ、ダメなんだから……あたしだけなんてつ、んんあ！ 啓太くんも一緒につ、つふあ、うつ、イクのおつ！ つあ、んんつふ……！」

あくまでもイタズラっぽく耳を跳ねさせ、七本のシッポがゆらりと宙を舞う。喘ぐ声を乱れさせながら前屈みになり、お尻を大きく振りたくる。

ぬちちちつ！ ぶちゅつ、にゆるるうつ、ぶちゅ！ ぐつちゅ、ずぶぬるるつ！  
「うあつ！ 菜々子さんつ……！ すご……いっつ！」

「はっ、早くうつ！ 啓太くんのをあたしにも……つあん！ ちょうだいっ、なかにっ、どびゅどびゅしてえ！ きやつ、んはあ、あつ、ふううん……つ！」

最後の意地とばかり、嬌声を上げながらの腰のくねり。

ペニスが掻き回しているのか、ペニスが掻き回されているのか、挿入の角度を頻繁に変えてのピストンで、陰唇がちやりとひしゃげて淫らな汁をしぶかせる。

（くつううつ、僕だつてつ、なかに……出したい……！）



強く掴まれた肩は痛いくらいなのに、求められているという実感を湧き上がらせるのに充分だった。牡の本能が背筋を痺れさせて、性の歓喜を求めている。

「出しますからっ！ 先生のなかにいつ、くうっ……！」

「う、んっ……！ だしてええっ！ 精液いっぱい出してえ!!」

宣言を受けた膣内が引き絞られる。

脈動に血管を膨らませるペニスをにちっと圧迫したのは蠢く膣襞の群れ。それらが一斉に波打ち、大波と小波の波濤がそれぞれに肉棒の海綿体をねぶり上げる――。

どびゅびゅびゅううっ！ どびゆるびゆるびゆるるっ！ どぶどぶぶぢゅうううっ！

「あつ――は……！ どびゅどびゅしてっ、るう……！」

シッポ群も膣内の動きに釣られたように一斉に波打ち、それからピンッと伸ばされて。

ごぶぷつ、と溢れ出てきた白濁をまるでお漏らしのようにしぶかせて、大きく跳ねた豊満な身体が、大きく揺れた乳房を弾けさせて反り返った。

「奥にきて……るうっ！ つはああ！ んふあつ、中出しされてっ、あたしイッチャうう

……！ イッ、イクツ、ううううんんっ！ イッ、あ、んきやあああんんんっ！

ピンと伸ばした背中に、ふるるるつと小さな痙攣を走らせ――。

絶頂の余韻に淡い吐息を漏らしながら、菜々子は放心したように身体を崩した。

「っはあ、はあ、はあ……」

それを受け止め、激しい呼吸で汗を拭う啓太。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

<http://ktcom.jp/>

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 11月発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!